

ボロブドゥール寺院の太陽の道

「蝶の雑記帳 85」決定稿

服部英二著『転生する文明』の前半で、ボロブドゥール遺跡が重要な位置を占めている。「はじめに」は、1983年2月25日払暁ボロブドゥールに立って曙光にシルエットとして浮かび上がるムラピ山を眺めた美しい文章を置いて、「何故ボロブドゥールがこの地に建てられたか」を悟った、「ムラピ火山の真後ろから太陽が昇るのを見られるのがこの丘なのだ」と書いている（書評もこの箇所を印象深いとしている）。けれども、よく考えてみると、ここの論理には飛躍がある。霊山ムラピ山に近いことが聖地になった理由だとしても、日の出の方角は季節ごとに変化するから、ムラピ山から出る朝日を拝める場所という条件だけでは、特定の地点を指定することはできない。

東西・南北を中心軸とする基壇と五層の方形壇の上に三層の円形壇をもつボロブドゥールの建物が曼荼羅を表現し、方形壇最上階第四回廊の四面の浮彫が密教の「大日如来」だということが、わたしにさらなる思索を促した。密教では先在した「華嚴経」に登場する毘盧遮那仏を「大日如来」とも呼ぶのだが、もともと毘盧遮那は「光明遍照」という意味で、太陽を象徴していると思われる。古代日本列島で崇拜された

「太陽の道」に関係すると考えることができる（「蝶の雑記帳 64、67、69」で論じ、著書『倭国はここにあった』に収録した）。ところで、東大寺の大仏は「華嚴經」の毘盧遮那仏であるが、大仏殿の棟が指示する東西線上には、平城宮・タカミムスビ神社・大仏殿・二月堂わきの泉がある。それは「太陽の道」の新しい形態と考えることができる。だから、ボロブドゥール寺院に東大寺と類似の「太陽の道」を探るのは意味があるだろう。

ボロブドゥール寺院のあるインドネシア・ジャワ島の地理を Google Earth の画像で示せば、図 1 のようになる。寺院とムラピ山の地理関係を緯度と経度で示すと、ボロブドゥール仏塔は南緯 7.608 度、東経 110.204 度にあり、ムラピ山の山頂は南緯 7.541 度、東経 110.445 度にある。ムラピ山の標高は 2930m、ボロブドゥールからの距離が 27.7km。カシオ計算サイトで求めると、ボロブドゥールから見てムラピ山の峰は、東西線よりも北寄り約 15.6 度の方角にある。ボロブドゥールから見る日の出の方角を求めると、春分まで一か月近くある 2 月 25 日、水平面上で東西線から南寄り約 9.6 度と出た。夏至の日の出の方角は、水平面上で東西線よりも約 23.5 度北寄り。朝日はムラピ山山頂よりも北から昇るのである。ボロブドゥールでムラピ山の山頂から昇る朝日が見られるのは、4 月下旬のようだ。

さらに地図を調べると、ボロブドゥールの東方はムラピ山

の山裾が広がっているほかは低地で、約 109km 行ったところに標高 3265m のラウ山というのがあった。単独峰をなしているこの火山も霊山とされているそうだ。山頂の位置は、南緯 7.625 度、東経 111.192 度。ラウ山の山頂は、緯度にしてボロブドゥール寺院よりも 0.0172 度南にある。ボロブドゥールの丘から見ると、春分・秋分の日朝日はもちろん真東の方角から昇る。ラウ山山頂はその方角よりもわずかに南寄りに位置するのである。冬至の日の出の方角を求めると、水平面上で東西線よりも約 23.7 度南寄りとした。冬至のこの朝日はラウ山の南隣の山よりも南の方角から昇ることになる。

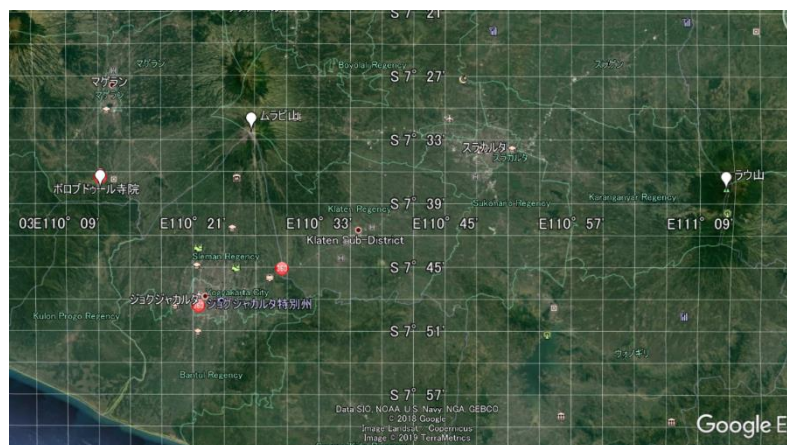


図1 ボロブドゥールの丘と二つの霊山ムラピ山・ラウ山のある地域の地形

Google Earth で調べると、ボロブドゥール寺院を通る東西線は、約 27km 前後にあるムラピ山南麓でいったん標高 800 m 近くに高まりその先は下る。さらに東に行くとラウ山の山塊に達して急に 2900m を越える尾根にまで高まる。ラウ山山頂は、ボロブドゥール寺院から見て、その東西線よりも南約 1.1 度の方角に位置する。こういう地理関係でボロブドゥールの丘からラウ山が見えるだろうか。寺院の建設によって変更を受けにくかった地点として東側の階段を登ってきた基壇の外の地面を選ぶと、Google Earth は標高を 266m と示した。上述の地理データを用いて計算すると、地球がおおよそ球形であることを考慮しても、ボロブドゥールの丘から、ムラピ山の南麓の後方に標高の高いラウ山山頂が見えるという結果が得られた。

以上をまとめると、ボロブドゥールの丘から東方を望めば、朝日は、おおざっぱに春分から秋分まで、ラウ山の峰よりも北側のムラピ山塊の背後から昇り、秋分を過ぎたころから春分ころまでは、ラウ山の峰よりも南側から昇る。ラウ山の峰は、ボロブドゥールから見て真東よりもわずかに南寄りに見えるけれども、おおそ春分・秋分の節目を教え、一年を夏期と冬期とに二分する標識となるのである。

このことの理解を助ける地形図を図 2 に示そう。この図は、JAXA から入手した「ALOS 全世界標高データ(30m メッシュ)」を画像にしたものである（あとで説明する「カシミール 3D」が作成した図である）。この地形図から、ボロブドゥールの丘に

立って東方を望めば、朝日が、夏期には左手のムラピ山の側から、冬期には右手のラウ山の側から昇ることが見てとれる。それでわたしは、最初、冬期にはラウ山とその南の山の稜線から朝日が昇るように見えるだろう、と錯覚した。しかしそれは、ムラピ山の南麓が視界を大きくさえぎることを正しく理解していなかったせいである。

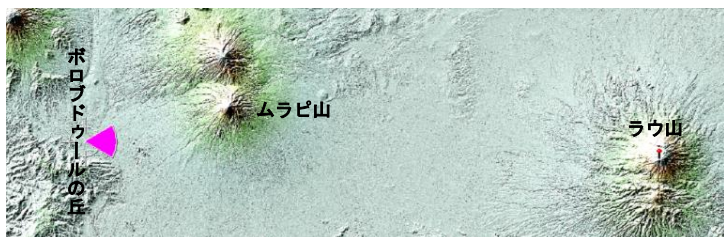


図2 ボロブドゥールの丘より東側の地形

ボロブドゥール寺院から東方の眺望を詳細に再現する必要がある。それを可能にする「カシミール3D」というソフトウェア（杉本智彦作成）があることを知っていたが、これまでそれを使うことができなかった。今回初めてそれをインストールし、使い方を学んだ。「ALOS 全世界標高データ」もそのとき入手し、図2を得たのである。その「カシミール3D」を用いて、私のボロブドゥールの丘から真東を望むとどう見えるか画像にすると、図3が得られる。この図には、2019年9月23日秋分の日の出、つまり春分・秋分の朝日の昇り方も示されている。上端の数字は真北を0度とする方位

角を示す。中央にある 90 度が真東を意味し、左右（北南）の方角はそれとの差によって求められる。



図 3 払暁にボロブドゥールの丘から真東を望む

ところがこの図では、払暁の山並みを描く暗い画像がムラビ山のシルエットを見せるばかりで、ラウ山を識別することができない。そこで、昼間の画像にしたら図 4 のようになった。こちらを見てもラウ山を見分けることができない。

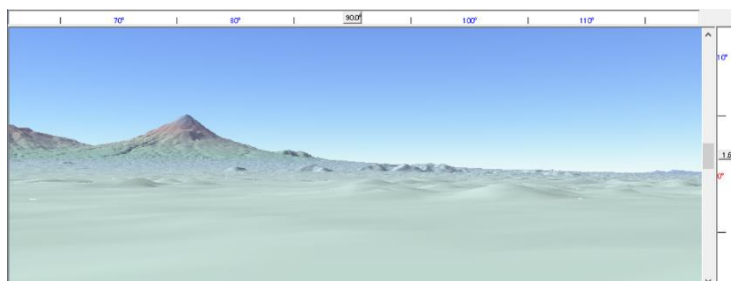


図 4 昼間ボロブドゥールの丘から真東を望む

わたしは動揺したが、計算はラウ山の峰が見えるという結果を出したから、東方の眺望に現われるはず。この段階になってやっと、わたしは「カシミール 3D」の操作法を習得した。カシミール 3D の画像はカメラで撮影したらどう見えるかを表現したもので、カメラの位置と目標を 3 次元座標で指定するのだ。カメラのレンズの焦点距離も変えることができる。そこで、200mm の望遠レンズに変えてラウ山の方角を撮影した。すると、図 5 の画像が得られた。ラウ山が写っている。念のために 100mm の望遠レンズで見える眺望も確かめたが、そこでもラウ山を見分けることができた。視力のよい人なら肉眼で、ムラピ山南麓の向こうにラウ山の峰を見ることができる。現代でも自然の中で暮らしている人がおどろくほどの視力をもつことを参考にすれば、古代人の視力は現代人よりもはるかに優れていただろう。



図 5 200mm 望遠レンズでラウ山を望む

先ほど、ボロブドゥールの丘の高さを基壇の外の地面の標

高に設定した。寺院が建設される以前丘の頂きはもっと高かっただろうが、基壇の外のその場所からでも見えたかを調べたのである。Wikipedia によれば、ラウ山は一度 1885 年に噴火したことが知られている。火口の複雑さが山頂の変形を教え、山の形が北側の過去の崩落を示唆する。現在も噴火するムラピ山の方は、過去の噴火で流れ出た溶岩が南麓に堆積していると見える。古代、ラウ山は、ボロブドゥールの丘の頂きから図 5 よりもよく見えた可能性が高い。

さて、大日如来の密教寺院を建設する場所としてボロブドゥールの丘が選ばれたのには理由があったはずである。その近くの小高いところであればたいい、ムラピ山の全容が見えてそのうしろから出てくる日の出を拝むことができるのに、ボロブドゥールの丘が選ばれたのである。その理由はやはり、図 3 と図 5 が教えるように、春分・秋分の日、真東のムラピ山南麓の背後から昇ってくる朝日のすぐ右隣りに、もっと遠くにあるだろう山の峰が見えたからだ、とするのが妥当である。その僥倖が、手前の雄大なムラピ山と遠くに顔をのぞかせる峰ラウ山の二つを霊山とし、ボロブドゥールの丘を日の出を拝む霊所にしたからだ、と。

この見方をもう少し詳述してみよう。図 2～図 4 を眺めれば、ムラピ山の西側に暮らしていた古代人にとって、ちょうど日本の富士山のように崇拝すべき霊山と見えたことが理

解できる。次のように考えることができるだろう。ボロブドゥールの丘は、靈山ムラピ山の壮麗な稜線から朝日が昇るのを見るのにふさわしい場所の一つだった、と。日の出を拝むためにその丘に登る人々は、昼間に眺望すれば、ほぼ真東のムラピ山の山麓の向こうに峰が見えることに気づいていた。それは好奇心をそそり、太陽はムラピ山よりも向こう側から昇るのだから、太陽がその奥の峰から出てくるという見立てを行なう人が出てもおかしくない。実際、日本列島と琉球で、そのような見立てをすることから「太陽の道」という観念が生まれたのである（「蝶の雑記帳 64」）。

ボロブドゥールの丘から東へムラピ山の南麓まで行けば、その峰がラウ山であることが分かる。その南側一帯に暮らす人々には、広い平野の東方に聳えるもう一つの雄大な山ラウ山も崇拝の対象だっただろう。ラウ山の稜線から昇る朝日も神々しく見え、この山をもまた靈山としただろう（イスラーム教徒になってからも、今も、ムラピ山とラウ山は靈山とされている）。こうして、この地域に暮らす古代人の心性に、二つの靈山のある土地に住んでいるという思いがつのる。くりかえせば、春分・秋分の日、靈山ムラピ山の背後の靈峰ラウ山のあたりから朝陽が射しこむボロブドゥールの丘は、その二つの靈山を望みながら日の出を拝むことのできる絶好の場所なのである。ボロブドゥールの丘が、二つの靈山と結びついた靈所となっただろう。

文明が進展すれば、春分・夏至・秋分・冬至を観測して暦

をつくり、方位も精確に観測できるようになる。ラウ山が精確にはボロブドゥールの丘の真東にないことが知られるようになるが、日の出を拝むのにボロブドゥールの丘よりもふさわしい場所は見出せなかったのだろう。この地域の朝日を拝む「太陽の道」はボロブドゥールの丘を通る東西線に設定された、と考えることができる。日本列島では、「太陽の道」という観念を具現化する神社がつくられた（「蝶の雑記帳 67」）が、琉球の斎場御嶽のように、ボロブドゥールの丘にも霊所であることを印づける何かがあった可能性がある。

このように考えれば、700 年代後半ジャワ島中部に密教の曼荼羅を具象化する寺院を建設するのに際し、ボロブドゥールの丘が選定された理由を合理的に理解することができる。なぜなら、曼荼羅の中心にいるのは太陽を象徴する大日如来なのだから。ボロブドゥール寺院が東西・南北を強く意識して建てられ、巡礼者が払暁に東面の階段を登ったことが上の議論を支持する。

この推定は、光明遍照仏すなわち毘盧遮那仏と東大寺大仏殿が、ボロブドゥール寺院と同じ世紀の少し前のことだけでも、日本列島古来の「太陽の道」を引き継いで建造されたとする見方によく対応する。

以上の議論によって、古代のインドネシア・ジャワ島中部で、ムラピ山とラウ山を霊山としボロブドゥールの丘を礼拝

所とする「太陽の道」が崇拜され、後代、その場所に毘盧遮那仏＝大日如来に捧げるボロブドゥール寺院が建造された、と結論できるだろう。

書かれた歴史よりもはるか昔から人類の精神に堆積してきたものが、遠く離れた場所に類似の文化的事象を生じさせたことに、わたしは感慨を抱く。

2019年9月20日、論述を整理

海蝶 谷川修